

は

はかなくて世にふるよりは山しなの官の草木とならましものを
少2

はかなくもふみとどめける浜千鳥あとはちとせの形見なりけり
桜7

はかなくも枕定めず明かすかな夢語りせし人をまつとて 常3
はかるめる言のよきのみ多けれどそらなげきをばこるにやある
らん 真11

萩の露玉にぬかむととればけぬよし見む人は枝ながら見よ 松
36 ②

はし鷹のとがへる山の椎柴の葉がへはすとも君はかへせじ 宿
19 ②

はだ寒く風は夜ごとになりまさる我が見し人はおとづれもせず

桐26 ②・横17

春はたゞ花のひとつへに咲くばかり物の哀は秋ぞまされる 横7

①
蓮葉の上はつれなき裏にこそ物あらがひはつくといふなれ 帝
26 ①・梅19 ②

はちす葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく 帝

32・螢12・真1・菜上64・菜下49・御22・句4

初風の涼しくもあるかわがせこが衣の裏のうらも寂しき 篝1

①

初雁のはつかに声をきゝしより中空にのみ物を思ふかな 霧7

③
初草のなどめづらしきことの葉ぞうらなくものを思ひけるかな
若11 ②・総60

初時雨ふるの山里いかならむ住む人さへや袖のぬるらむ 総45

②
はつせ川ふる川のべにふたもとある杉年を経てまたもあひみむ
二本ある杉 玉26・28 ③・手21・夢7

花ちりし庭の梢もしげりあひてうゑしかき根もえこそ見わかね
散6 ①

花散し庭の木のままも繁り合て天照る月の影ぞまれなる 散6 ③

花と見て折らむとすれば女郎花うたゝある様の名にこそ有りけ
れ 行11・手12

花鳥の色をも音をもいたづらにものうかる身はすぐすのみなり

桐51・薄25・初22・鈴7・竹13・早2

花にあかで何帰るらむ女郎花多かる野べにねなましものを 総

31 ①

花のいろはあかずみるとも鶯のねぐらの枝に手ななふれそも

初12 ③・梅11

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしま

に 菜下36

花の影たゝまくをしきこよひかな錦をさらす庭のみえつゝ 若

21

花の香のつまを忘れぬ春ごとに宿を枯れにし君をしぞ思ふ 早

14 ②

花の香を風のたよりにたぐへてぞ驚さそふしるべにはやる 初

18 ①・菜下 19・紅 3 ②・竹 6

花のごと世の常ならば過ぐしてし昔は又も返りきなまし 早 4

③

花もみつ紅葉をもみつむしの音もこゑくおほく秋はまされる

野 3 ⑦

離磯に立てるむろの木うたかたも久しき時を過ぎにけるかも

真 31 ①

浜千鳥飛び行くかぎりありければ雲立つ山をあはとこそ見れ

明 19 ③

俚人の名に負ふ夜声いしろくわが名は告りつ妻とたのませ

夕 42 ③

原の池に生ふる玉藻のかり初めに君を我が思ふものならなくに

真 34 ②

針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ 若 24

春秋にあへども匂ひもなきものはみ山隠れの朽木ならちむ 橋

41 ②・総 7 ③

春秋におもひ乱れてわきかねつ時につけつゝうつる心は 薄 24

②・朝 24・野 3 ⑤・5 ②・菜下 26 ②

春風は花のあたりをよきてふけ心づからや移ろふとみむ 帚 50

②・朝 18 ③

春がすみたつを見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる

早 11

春がすみたなびきにけり久かたの月の桂も花やさくらむ 竹 30

春霞たなびき渡る折にこそかゝる山辺はかひもありけれ 桐 27

①

春霞たなびく山の桜花みれどもあかねきみにもあるかな 東

5・浮 8 ②

春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも 胡 3 ①

春風は花のあたりをよきてふけ心づからや移ろふとみむ 散

1・菜上 7・73 ②

春きてぞ人もとひける山里は花こそやどの主人なりけれ 紅 6

①

はるくれば花見むと思ふ心こそ野べの霞とともにたちけれ 若

27 ②

春くれば宿にまづさく梅の花君が千歳のかざしとぞ見る 梅

1・菜上 22 ①

春ごとに花のさかりはありなめどあひみむことは命なりけり

柏 43・横 4

春雨のふらば野山にまじりなむ梅の花がさありといふなり 椎

39

春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなれば 柏 45

春雨は降り初めしかどうつたへに山を緑になさむとやみし 蘭

4 ①

春さらば挿頭にせむとわが念ひし桜の花は散りいにしかも 浮

47 ②

春過ぎて散りはてにける梅の花ただかばかりぞ枝に残れる 梅

3・宿46②

春なればするなる野のほととぎすほとと妹に逢はず来にけり 若22①

春の池の玉藻に遊ぶには鳥の足のいとなき恋もするかな 菜上

49

春のたつけふ鶯の初声を鳴きて誰にかまづ聞かすらむ 初12④

春の野におふるなき名のわびしきは身を摘みてだに人のしらぬ

よ 真29③

春の野にすみれ摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝にける

真29①・惟7②

春の野に野老求むといふなるはふたりぬばかり見出たりや君

横1①

春の野に鳴くかは鳥の声たてゝいたくは鳴かじ人しりぬべみ

宿75③

春の野にほるくみれどなかりけり世に所せき人の為には 横

1②

春の野に緑にはへるさねかつら我が君さねと頼むいかにぞ 帚

80

春の野の若菜ならねど君がため年の数をもつまむとぞ思ふ 菜

上25

春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば京の大路念はゆ 夕1

はるの日の影そふ池の鏡には柳のまゆぞまづはみえける 初8

②

春の日の霞める時に 墨吉の岸に出でゐて 釣船のとを

らふ見れば 古の 事と思はゆる 水江の 浦島の子が 堅

魚釣り 鯛釣り 釣り 七日まで 家にも来ずて 海界を 過

ぎて 漕ぎ行くに 海若の 神の女に たまさかに い漕ぎ向

ひ 相談ひ こと成りしかば かき結び 常世に至り 海若

の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携はり 二人入り居

て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるもの

を 世の中の 愚人の 吾妹子に 告げて語らく 須臾は

家に帰りにて 父母に 事も告らひ 明日のごと われは来な

むと 言ひければ 妹がいへらく 常世に また帰りに来て

今のごと 逢はむとならば この 篋 開くな動と そこらく

に 堅めし言を 墨吉に 還り来りて 家見れど 家も見か

ねて 里見れど 里も見かねて 恠しと そこに思はく 家

ゆ出でて 三歳の間に 垣も無く 家滅せめやと この箱を

開きて見れば もとの如 家はあらむと 玉篋 少し開くに

白雲の 箱より出でて 常世に 棚引きぬれば 立ち走り

叫び袖振り 反側び 足ずりしつ たちまちに 情消失せ

ぬ 若かりし 膚も皺みぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆ

なは 気さへ絶えて 後つひに 命死にける 水江の 浦島

の子が 家地見ゆ 帚60・須51②

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えぬ香やは隠るゝ 梅7

②・菜上37・句15・竹10・31・早8・浮21

春は梅秋はまがきの菊の花おのが香かくぞ哀なりける 帚9③

春はたゞ花こそは散れ野べごと錦をはれる秋はまされり 野

3④

春はたゞ花のひとつへに咲くばかり物の哀は秋ぞまされる 薄 23

②・野 3 ①

春はなほわれにて知りぬ花盛り心のどけきひとはあらじな 薄

14

春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我もたのまむ 藤 9

①

春べ咲く藤の末葉のうら安にさぬる夜ぞなき子をし思へば

藤 9 ②

晴るゝ夜の星か河辺の螢かも我がすむ方のおまのたく火か 薄

29・浮 28

春を待つ冬のかぎりと思ふにはかの月しもぞあはれなりける

朝 26

ひ

光出づる葵の影をみてしかば年へにけるも嬉しかりけり 菜上

66 ①

光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散るもの思ひもなし

須 20・幻 17

ひき植ゑし人はむべこそ老いにけれ松の木高くなりけるかな

蓬 34

引き初めて世々もへにける松なれど緑の色のあせずも有るかな

宿 2 ②

引き寄せばただにはよらで春駒の綱引きするぞなは立つと聞く

帯 43

ひぐらしの声もいとなくきこゆるはあき夕暮になればなりけり

空 6 ⑤・霧 3 ⑧

ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞあり

ける 霧 3 ②・38・宿 30

ひぐらしのなく夕暮ぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども

幻 33 ②

ひこ星に恋はまさりぬ天の川へだつる関を今はやめてよ 帯 89

②・総 50 ②・東 15

牽星の思ひますらむ情より見るわれ苦し夜のふけゆけば 宿 23

ひこ星のまれにあふ夜の床夏はうちはらへども露けかりけり

帯 66

久方の雨の降る日をたゞひとり山べにをればいふせかりけり

末 9・須 27

久かたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける 藤 33

ひさかたの月毛の駒をうち早め来ぬらむとのみ君を待つかな

明 39 ①

久方の月の桂もをるばかりいへの風をもふかせてしがな 藤

22・菜上 76

久方の中に生ひたる里なれば光をのみぞ頼むべらなる 松 37・

38

久かたのひかりのどけき春の日に静心なく花のちるらむ 浮 8

①

久方は手にとるばかりなりにけり雲のあるてふ寺に宿りて 松

40

膝に伏す玉の小琴の事なくはいとこだくにわれ恋ひめやも

若51 ②

ひたすらに我が思はなくに己れさへかり／＼とのみ鳴き渡るら

ん 帚29・末33・朝15・椎30 ③

常陸なるいかこの崎の忘れ貝拾ふかひなき者にも有るかな 常

32 ②

常陸なるをのだ御牧の露草をうつしは駒のおくにぞありける

霧42

常陸にも 田をこそ作れ あだ心 や かめとや君が 山を越

え 雨夜来ませる 若58

一重だにきるはわびしき藤衣重なる秋を思ひやらなむ 橋40 ①

他国に結婚^{よばひ}に行きて大刀が緒もいまだ解かねばさ夜ぞ明けにけ

る 若5

人恋ひてぬる春の夜はしきたへの枕寝覚めに流れ出でぬべし

柏5 ②

人心うさこそまされ春たてば止まらず消ゆるゆき隠れなむ 賢

3 ②

人ごととはあまの刈る薬にしげくとも思はましかばよしや世の中

賀28 ③

人恋ふる心は秋にかよへばや空も袂もともにしぐるる 賢52 ①

人しれずおもへばくるし紅のすゑつむ花の色にいでなむ 末31

①

人しれず待ちしもしるく鶯の声珍らしき春にもあるかな 初15

③

人知れず渡しそめけむ橋なれや思ひながらにたえにけるかな

賀21

人知れぬ思ひやなどとし垣のま近けれども逢ふよしのなき

常27

人しれぬ心のうちを見せたらば今までつらき人はあらじな 少

8

人知れぬねやは絶えするほととぎすただ明けぬ夜の心ちのみし

て 椎18 ②

人しれぬ人待ち顔に見ゆるはたが頼めたる今夜なるらむ 帚

10 ①

人しれぬ身は急げども年を経てなどこえがたきあふさかの関

若50

人知れぬわが通ひ路の関もりはよひ／＼ごとにもうちもねななむ

常17・藤1・菜上54

ひとたびも恋しと思ふに苦しきは心ぞぢぢにくたくべらなる

蓬14 ①・霧12 ②

一度も南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上にのぼらぬはなし 朝

31・橋13 ②

人魂のさ青^{あお}なる公がただ独逢^{はひあ}へりし雨夜の墓^{はむら}し思ほゆ 末22・

菜下48

人知れぬ我が思ひに逢はぬまは身さへぬるみて思ほゆるかな

菜下29

人妻と何かそを云はむしからはか隣の衣を借りて著なはも 少

3 ②

ひととせにこよひ数ふる今よりは百歳までの月影を見む 柏29

①

人ならば母が真愛子^{まなこ}そあさもよし紀の川の辺の妹と背の山 蘭

12 ⑨

人にあはむ月のなきには思ひ置きてむね走り火に心やけをり

帯55・霧37・浮56

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな 桐

30・39・40・賀10・37・葵27・賢55・須36・明54・松11・19・

薄8・少7・野15・菜上3・12・44・63・菜下58・柏18・39・

竹18・稚13・宿34・65・蜻22

人の児のかなしけ時は涙す鳥足^{あし}似む駒の愛しけくもなし 玉21

人の身の老を果てにしせましかば今日かあすかと急がざらまし

菜上15②・柏9

人の身もならはしものをあはずしていざ試みむ恋や死ぬると

幻36②

人の身もならはし物をいまゝでにかくてもへぬる物にぞ有りけ

る 幻36①

人のみることやくるしき女郎花秋霧にのみ立ち隠るらむ 霧8

②

人はいき思ひやすらむ玉鬘おも影にのみいと見えつゝ 玉37

③

人はいきことごとみなきながめにぞ我は露けき秋も知らるゝ

桐24①・25②

人はかる心の隈はきたなくてきよき渚をいかですぎけむ 竹15

①

人はゆき霧はまがきに立ちどまりさも中空に眺めつるかな 霧

7 ②

人もなき宿に匂へる藤の花風にのみこそ乱るべらなれ 蓬24

人間守り葦垣越しに吾妹子を相見しからに言ぞさだ多き 若56

①

人目多みただに逢はずてだしくも吾が恋ひ死なば誰が名あら

むも 霧78④

人めだに見えぬ山路にたつ雲をたれ炭がまの煙りといふらむ

手16②

人も見ぬ所に昔君とわがせぬわざ／＼をせしぞこひしき 玉12

人遣の道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りなむ 帯

69①・夕19②・賢21・少13・蘭13・柏7・総36

一世には二遍^{ふたへん}見えぬ父母を置きてや長く吾が別れなむ 霧27

人よりは我こそ先に忘れなめつれなきをしも何か頼まむ 宿45

人よりも思ひのぼれる君なればうべ山口はしるくざりける 松

20②

ひとりして聞くは悲しきほととぎす妹がかき根におとなはせば

や 幻27

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くる宵はつゆけかりけり

桐24③

独りねにありし昔のおもほえて猶なき床を求めつるかな 葵34

ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり 須46

②・柏5③・宿17②・浮51

ひとり寝のわびしきままに起きぬつゝ月をあはれといみぞかね

つる 宿15⑧・20②

人わたすことだになきを何しかも長柄の橋と身のなりぬらむ

東29

ひな鶴のしろたへごろも今日よりは千年のあきにたちやかさね

む 初27①

ひねもすにふる春雨や古へを恋ふる袂の雪なるらむ 蓬26

日の光やふしわかねばいその上ふりにし里に花も咲きけり 早

1

ひまもなく繁りにけりな大荒木のもりこそ夏のかけはしるけれ

賀17①

ひもろぎは神の心にうけつらし比良の高ねにゆふかつらせり

葉下13②

昼はきてよるは別るゝ山鳥の影みる時ぞねはなかれける 霧68

①・総34④

ひをのよるうちにはあらで西河の網だに有らばいをもすくはん

常1①

ふ

笛竹のものとの古ねは変るとも己がよゝにはならずもあらなむ

胡20②

笛の音の眷面白く聞こゆるは花ちりたりとふけばなりけり 手

18①

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりはすみぞめに咲け 薄

18・柏42・幻22・椎46

吹きくれば身にもしみける秋風を色なきものと思ひけるかな

葉36①・少10②・御8②

吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の 葉下

66

吹く風に詠へつくる物ならば此一本はよきよといはまし 帚50

①

吹く風に雲のはたてはとむともいかゞ頼まむひとの心は 真

8

吹く風よ心しあらばこの春はさくらはよきて散らさざらなむ

葉上73①

ふしてぬるとこ珍なる君なれば今しも逢へる心ちこそすれ

賢54

ふすほどもなくてあけぬる夏の夜はあひてもあはぬ心地こそす

れ 東25①

ふたつなき物と思ひし水底に山のはならで出づる月影 帚51①

二葉より今は太田の松の葉のいくよか君を恋てへぬらむ 胡26

②

二葉より今日を松とは引かるとも久しきほどを比べても見よ

初10

二人して結びし紐を一人して我は解き見じだに逢ふまでは

夕66

藤衣重ぬる思ひ思ひやる心はけふもやますざりける 橋40②

藤衣はつるゝいとはわび人の涙の玉の緒とぞなりける 賢44・

樵27

藤衣はらへてすつるなみだ川きしにもまさる水ぞ流るゝ 蘭3

① 藤波に松の嵐の音せずは何にかゝれる花としらまし 宿9

藤の花宮のうちには紫のくもかとのみぞあやまたれける 宿69

②

冬ごもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲かざ

りし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草深み

取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば 取りて

そしのぶ 青きをば 置きてそ歎く そこし恨めし 秋山わ

れは 薄23①・野3②

冬ながら春のとなりの近ければ中垣よりぞ花はちりける 夕

17・菜下60

冬なれど君がかきはにさきぬればうべ床夏に恋しかりけり 葵

41

冬の池のつがはぬ鴛鴦はさよ中にとびたちぬべきこゑきこゆな

り 末21③

ふりそめて友まつ雪はうば玉のわが黒髪の変るなりけり 菜上

39①

古りにし姫むすめにしてやかくばかり恋に沈まむ手兒の如 葵20②・

玉35・早27

ふりぬとて思ひも捨てし唐衣よそへてあやな恨みもぞする 賢

27②・藤25②

ふりはへていざ故郷の花見むとこしを匂ひぞ移ろひにける 蓬

5

故郷に花は散りつゝみ吉野の山の桜はまだ咲かずけり 若2①

故郷の奈良の都の始めより馴れにけるとも見ゆる衣かな 賢27

①

故郷は見しごとともあらず斧のえのくちし所ぞ恋しかりける 賢

26①・松17②・42①・胡5①

ふるさとを恋ふるたもともかわかぬにまたしはたるゝあまもあ

りけり 須28①・34④

ふる道にわれやまどはむ古の野中の草はしげりあひにけり 松

8

降る雪に色はまがひぬ梅の花かにこそ似たる物なかりけれ 梅

2・匂16

ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりと驚かれぬる 葵63

②・初26③

へ

隔てつる人の心のうき橋を危きまでもふみ見つるかな 東7①

ほ

はかざまに塩焼く煙なびかめやよももかたより風は吹くとも

宿49

法華経を我がえしことは薪こり菜つみ水汲み仕へてぞ得し 賢

53・常25・御4①・5③

ほととぎすうゑたつ山を里としらば木のまを行て聞くべきもの

を 葵22②

ほととぎすき鳴くを聞けば大荒木の森こそ夏の宿りなるらし

賀17③

時鳥ねぐらながらのこゑきけばくさの枕ぞ露けかりける 少18

②

郭公はつかなる音を聞き初めてあらぬもそれとおぼめかれつゝ

散2③

時鳥はつ声きけばあぢきなくぬし定まらぬ恋せらるはた 葵

21・散4

郭公なきて日数をたち花の花散る里に住む人やたれ 散9③

時鳥鳴きてひゝかす橋の花散るやどにくる人やたれ 散8②

時鳥なく音久しく成りぬるはさみだれながら幾よふればぞ 螢

2⑧

郭公なくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな 帚

72・夕9②・螢8

ほととぎす峯の雲にやまじりにしありとはきけと見る由もなし

葉上68・浮37③

郭公をちかへりなけうなるこが打ちたれ髪は五月雨の空 散5

②・螢

ほどふるもおぼつかなくはおもほえず言ひしに違ふとばかりは

しも 明18①

ほにいでゝうたゝにあらじ花すゝき風もよすがをいとはざらな

ん 帚90

ほのぼのと明石の浦の朝ぎりに島がくれ行く舟をしぞ思 明60

①・澤20②・松13・31

堀江こぐたななし小舟こぎかへり同じ人にや恋ひわたりなむ

若44①・真41・総30

ほり江には玉敷かましを大きみのみふね漕がむとかねてしりせ

ば 澤16①・初4

ま

槇の戸をやすらひにこそささざらめいかに明けぬる秋の夜なら

む 明41

槇柱造る柚人いさゝめのかりほの為と思ひけむやは 真18①

枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつるかな 空

10・柏21

まこもかる淀の沢水雨ふればつねよりことにまさるわが恋 浮

35

ますらをのうつし心も我は無し夜昼といはず恋ひしわたれば

賀28・葵16②

まだ知らぬ曉おきのわかれには道さへまどふ物にぞ有りける

総13

まだしらぬ人も有りけり東路に我も行きてぞすむべかりける

柏28

まだ宵にうち来てたたく水鶏かなたが門さしていれぬなるらむ

明 22

松風に耳なれにける山伏は琴を琴とも思はざりけり 明 23 ②

松島や小島の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか 霧

73 ①

松ならば引く人けふは有りなまし袖の緑ぞかひなかりける 霧

36

松の上になく驚の声をこそ初ねの日とはいふべかりけれ 初

11・12 ②

松のねは秋の調べに聞こゆなり高くせめあげて風ぞひくらし

常 13 ②

待つ人にあらぬものから初雁のけさなく声の珍らしきかな 須

50 ①

待つ人の今見えたらば疾き花を押し折り取れる心地こそせめ

蜻 27 ③

待つ人はたれならなくに時鳥思ひのほかになからうからむ 菜

下 6

松虫のはつこゑさそふ秋風は音羽山よりふきそめにけり 椎 11

松山につらきながらも波こそむことはさすがに悲しきものを

総 64

まてといふにちらでしとまるものならば何を桜に思ひまきまし

菜下 45・句 2 ③

まな鶴の葦毛の駒やながぬしの我が門過ぎば歩き留まれ 明 39

⑤

まめなれどあだ名は立ちぬ戯れ島よる白波を濡衣にきて 夕 24

まめなれどよき名も立たずかるかやのいざ乱れなむしどろもどろに 野 22

み

御足跡作る 石の響きは 天に到り 地さへ揺すれ 父母がた

めに 諸人のために 葵 24 ②

みがくらむ玉の光を頼むかなかずにもあらぬたてし瓦を 蓬 12

水隠れて生ふるさ月のあやめ草長きためしに人は引かなむ 螢

7

三笠山きてもとはれぬ道のべにつらきゆくての影ぞつれなき

若 34

み笠山さし離れぬときしかと雨もよにとは思ひし物を 椎 23

三日の夜の餅ひはくはじ煩し聞けば淀野には子つむなり 葵

57・霧 22

み狩りするかり場の小野の楢しばの馴れはまさらで恋ぞまされる

る 葵 62

御狩する駒のつまづく青つどら君こそ我はほだしなりけれ 賢

33・柏 2 ④

み熊野の浦の浜ゆふ百へなる心は思へどただに逢はぬかも 少

19

みくま野の浦よりをちにこぐ舟のわれをはよそに隔てつるかな

蓬 12

みごもりの神し誠の神ならばわが片恋を諸恋になせ 藤 2

みごもりの神に問ひても聞きてしが恋つゝあはぬ何の罪ぞも

総 70

みさごゐる荒磯波に袖濡れて誰がため拾ふいけるかひぞも 須

61 ①・松 22

みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり 桐 35

①・蓬 29

みじか夜の残りすくなくふけゆけばかねて物うきあかつきの道

夕 23

短か夜のふけゆくまゝに高砂のみねの松風ふくかとぞきく 明

51・菜上 26 ②・橘 38 ②

見し人の煙となりし夕より名もむつまじきしほがまの浦 夕 61

①・須 7 ②

見し人の雲となりにし空なれば降る雪さへも珍らしきかな 夕

61 ②

見し人も忘れのみゆくふる里に心ながくもきたる春かな 総 55

②

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮ら

さむ 菜上 80・81

みそぎして思ふことをぞ祈りつる八百万代の神のまに 須

68 ①

みそぎするけふ唐崎におろす網は神のうけひく験なりけり 少

18 ①

道の口 武生の国府に 我はありと 親に申したべ 心あひの

風や さきむだちや 浮 43・手 18 ②

陸奥のあさかの沼の花がつみかつ見る人に恋ひやわたらむ 明

56

陸奥の安達の原の黒づかに鬼こもれりといふはまことか 夢 1

みちのくのしのおもぢずり誰故に乱れむと思ふ我ならなくに

帯 2 ②・蘭 12 ⑦

陸奥のちかの塩がまちながら遥けくのみも思はゆるかな 霧

75

陸奥のをだえの橋や是ならむふみふますみ心まどはす 蘭 12

⑤

道もあらじいかでか行かむ白雪のふりおほふ竹のよも深にけり

真 7

みづうみに潮たるばかりをさなくて都に年の老いにけるかな

玉 20 ①

みつせ川渡るみさをもなかりけり何に衣をぬぎてかくらん 朝

32・真 3

水鳥のしたやすからぬ思ひにはあたりの水も氷らざりけり 真

9・宿 47

水鳥を水の上とやよそに見む我も浮きたる世をすぐしつ 橋

33 ②

水の泡のきえて憂き身といひながら流れてなほも頼まるるかな

柏 27 ①・東 14

水の上に数書く如きわが命を妹に逢はむとつけひつるかも 蘭

1

水の面にあや織り乱る春雨や山の緑をなべて染むらむ 胡 4 ②

①

水の面にあや吹き乱るはる風や池の水を今日はとくらむ 胡 4

水の面にしづく花の色さやかにも君がみ影の思はゆるかな 賢

24 ②

みてぐらはわがにはあらず天にます豊岡姫の宮のみてぐら 少

15

見てのみや人に語らむ桜花手ごととに折りていへづとにせむ 松

36 ③

緑なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける 柏47

緑なる松にかかれる藤なれど己が頃とぞ花はさきける 藤13

緑子の 若子が身には たらちし 母に懐かえ ひむつきの

平生が身には 木綿肩衣 純裏に縫ひ着 頸着の 童児が身

には ゆひはたの 袖着衣 着しわれを にほひよる 子ら

が同年輩には 蟪の腸 か黒し髪を ま櫛もち ここにかき

垂り 取り束ね 挙げてもまきみ 解き乱り 童児に成しみ

さ丹つかふ 色懷しき 紫の 大綾の衣 住吉の 遠里小野

の ま櫛もち にほしし衣に 高麗錦 紐に逢ひ着け 指さ

ふ重なふ 並み重ね着 打麻やし 麻績の児ら あり衣の

宝の子らが 打袴は 経て織る布 日曝の 麻紵を 信市

裳なす 愛しきに取りしき 屋に経る 稲置丁女が 妻問ふ

と われに遣せし をちかたの 二綾下沓 飛ぶ鳥の 飛鳥

壮士が 長雨禁み 縫ひし黒沓 さし穿きて 庭に彷徨め

退り勿立ちと 障ふる少女が 髻髻聞きて われに遣せし

水縹の 絹の帯を 引帯なす 韓帯に取らし 海神の 殿の

蓋に 飛び翔る すぐるの如き 腰細に 取り飾らひ 真澄

鏡 取り並め懸けて 己が顔 還らひ見つつ 春さりて 野

辺を廻れば おもしろみ われを思へか さ野つ鳥 来鳴き

翔らふ 秋さりて 山辺を行けば 懐しと われを思へか

天雲も 行き棚引ける 還り立ち 路を来れば うち日さす

宮女 さす竹の 舍人壮士も 忍ぶらひ かへらひ見つつ

誰が子そとや 思はえてある かくの如 せられし故に 古

さざきしわれや 愛しきやし 今日やも子等に 不知にとや

思はえてある かくの如 せられし故に 古の 賢しき人も

後の世の 鑑にせむと 老人を 送りし車 持ち還り来し

持ち還り来し 薄10 ③・蘭4 ⑥

水無瀬川ありて行く水なくばこそ終に我が身を絶えぬと思はめ

常31 ③

みなと入りの葦わけ小舟さはりおほみわが思ふ人に逢はぬころ

かな 若44 ②・総69

皆人の老を忘るといふ菊は百年をやる花にぞありける 句11 ②

皆人の背き果てにし世の中にあるの社の身をいかにせむ 鈴13

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ 早

13・23

みな人は花や蝶やといそぐ日も我が心をばきみぞ知りける 霧

47

みなれ木の見なれそなれてはなれなば恋しからむや恋しからじ

や 葵50 ①・松5

身に寒く秋のさよ風吹くからに旧にし人の夢にみえつる 桐26

①・葵36 ②

24 峯に日やけさはうららにさしつらむ軒のたるひの下の玉水 末

身の憂きに思ひあまりのはて／＼は親さへつらきものにぞありける 霧65②

身の憂きをしればはしたに成ぬべみ思へば胸の焦れのみする 霽69②

身の憂きを世のうきとのみながむればいかに大空苦しかるらん 霧44①

みのうさに思ひ明石の浦風にあまの歎きはいつか絶ゆべき 明26②

身は捨てつ心をだにもはふらさじつひにはいかゞなると知るべく 若63・明2・玉2・常20・幻20・橋39

身ひとつにあらぬばかりをおしなべて行きめぐりてもなどか見ざらむ 須2②

御馬草取り飼へ 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女

眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女 霧10③・椎42①

宮城野のもとあらのか萩露を重み風を待つごと君をこそまて

桐35③・48③・野⑨・御10・東27

都いでゝ今日みかの原泉がはかは風さむし衣かせやま 宿74

都にて珍らしとみる初雪は吉野の山に降りやしぬらむ 胡1

都にて山のはに見し月なれど波より出でゝ波にこそ入れ 早29

都には見るべき人もなき物をつねを思ひて春や来ぬらん 早4

① 都にも恋しき事の多ければ猶このたびはいかむとぞ思ふ 桐15

③ 都人いかにと問はゞ山高みはれぬ雲居にわぶとこたへよ 浮3

②

都より雲の八重たつおく山の上川の水はすみよかるらむ 松30

③・橋16①

宮造るひだの匠の手斧の音ほと／＼しかるめをもみしかな 螢

11・藤12②

み山木に夜はきて鳴く箱鳥のあけば帰らむことをこそ思へ 菜

上77①

み山には霰ふるらしと山なる正木のかづら色づきにけり 総68

②

み山には松の雪だにきえなくに都はのべの若菜つみけり 末25

①・椎34③

みゆきふる春日の山のさくらばなえこそみわかねこきませにし

て 若59②

み吉野の青根が峯のこけむしろ誰か織りけむ経緯なしに 蜻19

①

み吉野の大川のべの藤浪のなみに思はばわが恋ひめやは 常33

①

みよし野の大河水のゆほびかにあらぬ物故波のたつらむ 若

6・常33③

み吉野の象山蔭に立てる松いく秋風にそなれきぬらむ 葵50②

みよしののたのむの雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

桐20・蓬7

み吉野の 御金の嶽に 間無くぞ 雨は降るといふ 時じくぞ

雪は降るといふ その雨の 間無きが如 その雪の 時じく

が如 間もおちず 吾はぞ恋ふる 妹が正香に 夕 30 ①
み吉野の山のあなたに宿もがな世のうき時の隠れがにせむ 蓬

15 ①・松 34

見る石の面に物は書かざりきふしのやうじはつかはざらめや

橋 5

見るからに袂ぞぬるゝ桜花空より外の露やおくらむ 菜下 40 ⑦

見る毎に秋にもなるかな立田姫紅葉そむとや山もきるらむ 帚

45 ②・48 ①

見る毎に袖ぞぬれぬるなき人の形見に見よと植ゑし花かは 幻

10 ②

見る時は事ぞともなくみぬ時はことあり顔に恋しきやなぞ 霧

15

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし 花

11・胡 2・幻 13 ①

見る人もなくてちりぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり 賢 46・

澤 10・松 10 ①

みるめ刈る漏やいづこそ棹さして我に教へよあまの釣舟 真 40

みわが崎荒石も見えず波立ちぬいづくゆ行かむ避道は無しに

帚 50 ③・真 4 ②

見わたせば柳さくらをこきませて都ぞ春の錦なりける 若 59

①・少 27・初 34 ①・胡 8

三輪の山いかに待ち見む年ふとも尋ぬる人もあらじと思へば

賢 9 ②

三輪の山しるしの杉はかれずとも誰かは人の我を尋ねむ 蓬 31

②

三輪山の山辺真麻木綿短木綿かくのみ故に長しと思ひき 桐

41・夕 58

身をうしといひこし程に今はまた人の上とも歎くべきかな 朝

14

身を憂しと思ふに消えぬものなればかくてもへぬる世にこそあ

りけれ 桐 49・幻 36 ③・総 1

身をうしと人しれぬよを尋ね来し雲の八重立つ山にやは非ぬ

松 30 ②

身をすればうらみぬものをなぞもかくことはりしらぬ涙なるら

む 宿 41

身を捨てつ心をだにもはふらさじ終には如何なると知るべく

夕 54 ②

身をすてゝ深き淵にも入りぬべし底の心のしらまほしさに 霧

77 ①

身を捨てゝ山に入りにし我なれば熊のくらはむことも覚えす

菜上 67

身を捨てて行きやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

葵 15・霧 24

身をすみて長からぬ世を知る人はひとへに人を恨みざらなむ

竹 20

身をすみて人のいたさぞしられける恋しかりしに恋しからんや

澤 22

身をつめば露をあはれと思ふかな曉ごとにいかでおくらむ 真

29 ②

身をわくることのかたさに増鏡影ばかりをぞ君にそへつる 須
11

む

昔こそ難波田舎と言はれけめ今は京引き都びにけり 落21

昔せし我がかねごととの悲しきはいかに契りしなごりなるらむ

真28 ①

昔よりいひしきにける事なれば我らはいかゞ今は定めむ 菜下

26 ①

昔より山水にこそ袖ひづれ君がぬるらむ露はものは 若20 ③

武蔵鑑さすがに掛けて頼むには訪はぬもつらし訪ふもうるさし

帯46・夕13

武蔵野のむかひの岡の草なればねを尋ねても哀とぞ思ふ 蘭7

②

武蔵野は袖ひづばかり分けしかどわか紫は尋ねわびにき 蘭7

①

虫だにもあまた声せぬ浅茅生にひとり住むらん人をこそ思へ

末5

虫の如声に立てゝは鳴かねども涙のみこそ下に流るれ 帯64 ②

むしぶすま柔やが下に臥せれども妹とし寝ねば肌し寒しも 賢

47

席田の 席田の 伊津貫川にや 住む鶴の 住む鶴のや

住む鶴の 千歳を予てぞ 遊びあへる 千歳を予てぞ 遊び

あへる 菜上61

結び置きし形見のこだになかりばせ何に忍ぶの草をつまゝし

若14・葵29・柏33・宿53・手8 ②

むすばゝれ燃えし煙をいかゞせん君だにこめよながき契りを

薄22・柏6 ①

むつこともまだ尽きなくに明けぬめりいつらは秋の長してふ夜

は 帯37

陸まじき妹背の山の中にさへ隔つる雲のはれずもあるかな 蘭

12 ②

紫にやしほそめたる藤の花いけに灰さす物にぞありける 真27

②

紫の色に心はあらねども深くぞ人を思ひそめつる 真27 ③

紫の雲とぞ見ゆる藤の花いかなるやどのしるしなるらむ 宿69

①

紫のひとつとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る 若

46・60 ②・朝28 ②・胡13 ①・真20・藤7・菜上31・竹28・椎

7 ①・東6

紫は灰さすものぞつば市の八十のちまたに逢ひし児や誰 末

17・玉22 ①・真27 ①

むら鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめや

須13 ②・行13・菜上47・霧48・76 ②・総12・29

め

珍しき千世の始の子の日にはまづけふをこそひくべかりけれ

初9①

珍しき人を見むとやしりもせぬ我が下紐のとけわたるらむ 桐

6

目には見て手には取られぬ月のうちの桂の如き君にぞありける

蜻35③

目をさめてひまより月を眺むれば面影にのみ君は見えつる 葵

59・明11

も

燃え果てゝ灰となりなむ時にこそ人を思ひのやまむごにせめ

桐19

萌えわたる草木もあらぬ春へには山辺にいそぐ鹿ぞふむらし

若22②

もえ渡る歎きは春のさがなれば大方にこそあはれともみん 賀

2

黙然あらじと言の慰にいふ言を聞き知れらくはあしくはありけ

り花3

黙然をりて賢しらするは酒飲みて酔泣するになほ若かずけり

藤8②・菜下62②

元の香のあるだにあるを梅の花いとど匂ひの遥かなるかな 紅

9

もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年は今日にはてぬとかき

く幻45

物思ふと月日のゆくも知らざりつ雁こそ鳴きて秋を告げゝめ

柏35

物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる玉かとぞみる 葵

14②・19①・浮57②

もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らずも

夕33②

物皆は新しきよしただしくも人はふるきし宜しかるべし 桐16

紅葉する秋は来にけり水鳥の音羽の山の色づく見れば 菜上59

①・夢3①

もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をきゝ渡るらむ 菜

下11①

紅葉はに色見えわかで散る物は物思ふ秋の涙なりけり 桐47①

紅葉ばの流るゝ時はたけ川のふちのみどりも色かはるらむ 竹

11①

もみぢばの流れてとまる網代にも白波も又寄らぬ日ぞなき 総

53①

もも草の花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとがめそ 薄

20

百敷に千年の事は多かれどけふの君はためづらしきかな 桐10

百敷の内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすみうし 賢

56・松30④・橘16②

もしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてここにつどへり

須58・手32

百敷は斧の柄くたす山なれや入りにし人の音づれもせぬ 胡5

②

桃花ぞめの浅らの衣浅らかに思ひて妹に逢はむものかも 空12

②

もも千鳥さへづる春はものごとにあたらまれども我ぞふりゆく

末38・真26・菜上51②・御7①・幻1②・5

百年に老舌出でてよよむともわれはいとはじ恋は益すとも 帚

31・須52

百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらし面影に見ゆ 手2

百年にやそとせそへていのりける玉の験を君みざらめや 玉11

百に干に人は言ふとも鴨頭草の移ろふ情吾持ためやも 葵16⑥

もる人もありとはきけど逢坂の関もとどめぬ我が涙かな 菜上

50.①

もろかづら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなるらむ

菜上66②

もろこしの吉野の山にこもるともおくれむと思ふ我ならなくに

薄7

もろともにおきぬし秋の露ばかりかゝらむものと思ひかけきや

幻37②

もろともに君もほさなむ濡れ衣かゝるなき名は我のみぞ立つ

霧5②・18④

や

八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を 浮40③

やどあれて昔の人は見えねどもすみにし水のたえぬをぞみる

松25

宿かへて待つにも見えずなりぬればつらきところの多くもある

かな 薄1

八重とづる道は夢にもまどふらしぬるたまにだに逢ふと見えね

ば 蓬9①

八重むぐらしげれる宿の寂しきに人こそ見えね秋はきにけり

桐31②・夕34・須42③

山おろしの風の声のみはげしくて井堰の水はもれど寝られず

若16

山かくす春の霞ぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ 須

23・25・浮3①

やま風のはなの香かどふ麓には春の霞ぞほだしなりける 初18

②・梅18②

山風の吹きのまにまに紅葉ばはこのもかものに散りぬべらなり

夕7②

山風もふせきとりつる皮衣うれしき波に袖はぬれつゝ 末23②

山がつの垣ほにはへる青つゞら人はくれども言伝もなし 帚63

①・空11

山河にうへを伏せ置きて守りあへず年の八歳をわが盗まひし

末18②

やま桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ 若

26・初34②・野10②・菜下25・御6

山桜見にゆく道をへだつれば人の心ぞかすみなりける 賢49

山里の霧の籬のへだてずはをちかた人の袖もみてまし 若54

⑥・霧8①

山里の草葉の露はしげからむみのしろ衣ぬはずともきよ 初26

①

山里の人のみなかげけふみれば薄く霞の峯にうひたつ 葵22③

山里の物さびしきは萩の葉のなびくごとにぞ思ひやらるゝ 夕

64

山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴くねにめをさましつゝ

霧58・手15

山里は物の寂しき事こそあれ世の憂きよりは住みよかりけり

帚27・宿11・東38

山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば 夕

50・椎24②・総39・浮30

山代の石田の社に心鈍く手向したれや妹に逢ひがたき 総10

やましるの風の寒さにをとめをぞかけてねぬ夜のながきなよ竹

帚84②

山城の 狼のわたりの 瓜つくり な なや さいしなや

さいしなや 瓜つくり 瓜つくり はれ 瓜つくり 我を欲

しといふ いかにせむ な なや さいしなや さいしな

や いかにせむ いかにせむ はれ いかにせむ なりやし

なまし 瓜たつまでに や さいしなや さいしなや 瓜た

つま 瓜たつまでに 賀25①

山城のこまのわたりのうりつくりならひて後ぞくやしかりける

賀25②

山しろのをのゝ山人里とをみかりのやどりをとりぞかねつる

霧57①

山高み人もすさめ桜花いたくなわびそわれ見はやさむ 花7

②・松28②・初28・梅16・幻4

山寺の入相の鐘の声ごとにけふもくれぬと聞くぞ悲しき 澤

24・総77

山鳥のほろ／＼となく声きけば父かと思ふ母かと思ふ 手

25

山の端にいさよふ月を出でむかと待ちつゝをるに夜ぞふけにけ

る 夕33①

山の井の浅き心も思はぬにかげばかりのみ人の見ゆらむ 若37

②・葵11②

山吹を屋戸に植ゑては見るごとに思ひは止まず恋こそまされ

真36④

山伏ものおしもかくて心みつ今はとねりのねやぞ床しき 初26

②

やゝもせば風にしたがふ雨のをとをたえぬ心にかけずもあらな

ん 御11②

やゝもせば消えぞしぬべきとにかくに思ひみだるゝかるかやの

露 御11①

耶輸陀羅が福地の園に種まきてあはむかならず有為の都に 菜

上72 ①

やよやまで山時鳥ことつてむわれ世の中にすみわびぬとよ 明

33

やれば惜しやらねば人に見えぬべし泣くもなくなほ返すまされ

り 幻40・浮48

八少女は 我が八少女ぞ 立つや八少女 立つや八少女 神の

やす 高天原に 立つ八少女 立つ八少女 句14 ①・17

ゆ

ゆかばこそ逢はずもあらめ帯木のありとばかりは音づれよかし

帚94 ②

行き帰りこゝもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりくゝとなく

椎30 ②

行きかへるやそ氏人の玉鬘かけてぞ頼むあふひてふ名を 葵6

①

雪消えに袖はぬれつゝいつしかと春日の野べに若菜つみけり

椎43

行きて見ぬ人も忍べと春の野の筐に摘める若菜なりけり 早5

①

雪の中にほゝゑむ梅のかほをこそ我もをかしと思ふべらなれ

末20

雪の中に山のふもとの雲はれてさきたる花は散るよしもなし

幻43 ①

雪深き山路に何にかへるらむ春待つ花のかげにとまらで 幻44

行きめぐり逢ふを松浦の鏡には誰をかけつつ祈るとかしの 玉

15 ②

ゆきやらぬ夢路に惑ふ袂には天津空なき露ぞおきける 菜下40

⑥

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり 須

15・総33・蜻23

行く末も子の日の松のためしには君が千年をひかむとぞ思ふ

初9 ④

行く人もとまるも袖の涙川みぎはのみこそぬれまさりけれ 須

29 ②・明5 ②

行く舟の跡なき波にまじりなばたれかは水の泡とだに見む 浮

37 ①

ゆひそむる初もとゆひのこ紫衣のいろに移れとぞおもふ 桐

63・64 ③

ゆふかづらするゑはもりくる月影の下照る姫の宿をさすらん 菜

下13 ①

夕霧に衣は濡れて草枕旅寝するかもあはぬきみゆゑ 霧6・18

①

夕霧にむろのとほそもたちこめて入るべき道も見えずもあるか

な 若23 ①

夕暮は雲のけしきをみながらに眺めじと思ふ心こそつけ 柏46

①

夕さればいとゞ干難き我が袖に秋の露さへおきそはりつゝ 若

19

夕されば君を待乳の山鳥のなくなくるを立ちもきかなむ 若

41

夕さればさほの河原の河霧に友まどはせる千鳥鳴くなり 椎25

②

夕されば野にも山にも立つ煙歎きよりこそ燃えまさりけれ 須

55 ②

夕されば野べになくてふかは鳥の顔に見えつゝ忘れなくに

真37 ②・宿75 ②

夕されば螢よりけにもゆれども光みねばや人のつれなき 夕15

ゆふだすきかけてもいふなあだ人のあふひてふ名はみそぎにぞ

せく 葵6 ②

夕やみは道たど／＼し月まちて帰れわがせこそそのまにも見む

空2・菜下51・霧11

弓はりの山のはさしている時はあやしく物ぞかなしかりける

花10 ①

夢かとも思ふべけれど覚束なねぬに見しかばわきぞかねつる

末39 ②

夢にだに見ゆとは見えじ朝な／＼我が面影にはづる身なれば

総47

夢にてもみてや心のなぐさまん悪しくもよくもいこそ寝られね

総9 ①

夢のごとおぼめかれ行く世の中にいつ訪はむとか音信もせぬ

散2 ①

夢の中にあひみん事をたのみつゝ暮せる宵はねむ方もなし 帚

93 ③

ゆゝとしていむとも今はかひも有らじ憂きをば風につけて止み

なむ 桐38 ②

よ

よさの海のおまのしわざとみし物をさもわが焼くとたるるしほ

かな 須34 ③

よしさらばつらさは我に習ひけり頼めて来ぬは誰か教へし 菜

上8 ②

よしとてもよき名もたゞずかるかやのいさ乱れなんしどろもど

ろに 梅15

吉野川いはなみたかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし 玉28

②

よそにありて雲居にみゆる妹が家に早く至らむ歩め黒駒 須64

①・橋21 ①

よそにのみ哀とぞ見し梅の花あかね色香はそりてなりけり 竹

2

よそに見て帰らむ人に藤の花はひまつはれよ枝は折るとも 夕

8

よそに我人々ごとを聞きしかば哀とも思ふあな憂とも思ふ 霧

79

よそのみに見つつ恋せむ紅の末摘花の色に出ですとも 末31②
よそへつつ見れど露だに慰まずいかかはすべきなでしこの花

賀11

四の緒に思ふ心を調べつゝひきありけども知る人もなし 明21

世とともに我がぬれ衣となる物はわぶる涙のきするなりけり

霧18③

よに隠れきつるかひなく紅葉ばも月に赤くぞ照りまさりける

須5・柏17

世にふれば憂さこそまされみ吉野の岩の陰道ふみならしてむ

賢35・橋26・椎33

世にふれば言の葉しげき呉竹のうきふしごとに驚ぞなく 逢2

③

世にふれば又も越えけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらむ 賢

1①・2①・澤25

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ

若43・葵33・賢22・蓬15②・初23・梅18①・菜上2③・9・

43・69・柏2③・鈴14・幻8・21・橋1・椎28・宿5・手16

①・夢2

世の常に思ふ別れの旅ならば心みえなる手向せましや 夕68②

よの常はなげらのよそに見えし人も秋風ふけばそれぞ悲しき

若47①

世の中といひつるものはかげろふのあるかなきかのほどにぞあ

りける 霧2・蜻36⑦

世の中にあらぬ所もえてしがな年ふりにたるかたち隠さむ 横

3・東28①・手6

世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな

須18②・玉1①

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のため

夕11②・松12②・菜上2②

世の中にふりぬる物は津の国のながらの橋と我となりけり 賀

22②

世の中に経るかひもなき竹の子は我が経む年を奉るなり 横1

③

世のなかの遊びの道にすずしくは酔泣するにあるべかるらし

菜下62③

世の中のうきたび毎に身を投げば深き谷こそ浅くなりなめ 夕

52①・霧77②・蜻1・17

世の中のうきはなべてもなかりけり頼む限りぞ恨みられける

帚61

世の中の憂きもつらきも悲しきも誰にいへとか人のつれなき

早3

世の中のうけくにあきぬ奥山の木の葉にふれる雪やけなまし

賢3④・明1・幻6②

世間の術なきものは 年月は 流るる如し 取り続き 追ひ

来るものは 百種に 迫め寄り来る 少女らが 少女さびす

と 唐玉を 手本にまかし 同輩児らと 手携りて 遊びけ

む 時の盛りを 留みかね 過し遣りつれ 雌の腸 か黒き

髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 面の上に 何処ゆ

か 皺が来りし 大夫の 男子さびすと 剣太刀 腰に取り

佩^はき 獵^う弓^{きう}を 手^て握^{にぎ}り持^もちて 赤^せ駒^こに 倭^わ文^{ぶん}鞆^{たも}うち置^おき 匍^も

ひ乗^{のり}りて 遊^{あそ}びあるきし 世^よ間^{かん}や 常^{じょう}にありける 少^{せう}女^{にょ}らが

さ寝^ねす板^{いた}戸^こを 押^おし開^{ひら}き い辿^{たど}りよりて 真^ま玉^{ぎよく}手^ての 玉^{ぎよく}手^てさ

し交^かへ さ寝^ねし夜^よの 幾^{いく}許^こもあらねば 手^て束^た杖^{じょう} 腰^{こし}にたがね

て か行^いけば 人^{ひと}に厭^{いと}はえ かく行^いけば 人^{ひと}に憎^{にく}まえ 老^{らう}男^{なん}

は 斯^{しか}くのみならし たまきはる 命^{いのち}惜^おしけど せむ術^{じゆつ}も無^な

し 若^わ29

世^よの中^{なか}の 人^{ひと}の 心^{こころ}は 花^{はな}ぞめ の うつろひ や すき 色^{いろ}に ぞ あり ける 総^{そう}

61 世^よの中^{なか}は いかに 苦^{くる}しと思^{おも}ふらむこゝらの人^{ひと}に 恨^{にく}みらるれば 少^{せう}

11・霧^{きり}42 世^よの中^{なか}は いづれ か さして わが ならむ 行^いきと まるを ぞ 宿^{しゆく}と 定^{さだ}むる

夕^{ゆふ}3 世^よの中^{なか}は くらべ 苦^{くる}しく 成^{なり}りに けり な が く み じ かく 思^{おも}ふ す ぢ な し

帯^{おビ}70・松^{まつ}18・幻^{まぼろし}19 世^よの中^{なか}は ほか ならぬ か かげ ろ ふ の ある か な き か と わ き ぞ か ね

つる 蟻^{あみ}36② 世^よの中^{なか}は とも かく ても 同^{どう}じ こと 宮^{みや}も わら や も 果^はて し な け れ ば

夕^{ゆふ}4②・須^す60・薄^{うす}3・螢^{へい}15・真^ま23・絵^え62 世^よの中^{なか}は 何^{なん}か 常^{じょう}なる あす か 川^{かわ} 昨^{きのう}日^{にち}の 淵^{ふち} ぞ 今^{いま}日^{にち}は 瀬^せに なる 少^{せう}1

② 世^よの中^{なか}は 昔^{むかし}より や は 憂^{うれ}かり け む わ が 身^みひ と つ の た め に な れ る か

蓬^{よもぎ}13・宿^{しゆく}62②・東^{あづま}8② 世^よの中^{なか}は 夢^{ゆめ}の わ た り の 浮^う橋^{はし} か う ち 渡^{わた}り つ つ も の を こ そ 思^{おも}へ 薄^{うす}

15・菜^な上^{じやう}71

世^よの中^{なか}を うしと いひ ても いづこに か 身^みを ば 隠^{かく}さむ 山^{さん}梨^りの 花^{はな} 総^{そう}

18②・19 世^よ間^{かん}を 憂^{うれ}しと や さし と 思^{おも}へ ども 飛^とび 立^たち か ね つ 鳥^{とり}に し あ ら ね ば

末^{すえ}21① 世^よの中^{なか}を か くい ひ 〳〵 の は て 〳〵 は い か に や 〳〵 な ら む と す ら

む 帯^{おビ}74・葵^{あひろ}38・竹^{たけ}33 世^よの中^{なか}を 何^{なん}に た と へ む 朝^{あさ} ば ら け と ぎ ゆ く 舟^{ふね}の 跡^{あと}の し ら 波^{なみ} 総^{そう}42

世^よの 人^{ひと}の 心^{こころ}々^々に 有^あり け れ ば 思^{おも}ふ は つ ら し 憂^{うれ}きは 頼^{たの}ま ず 総^{そう}40

世^よの 人^{ひと}の 貴^きび 願^{ねが}ふ 七^{しち}種^{しゆ}の 宝^{たから}も わ れ は 何^{なん} 爲^なむ わ が 中^{なかつ}の

生^なれ 出^でで たる 白^{しろ}玉^{ぎよく}の わ が 子^こ古^{ふる}日^{にち}は 明^あ星^{せい}の 明^あく る 朝^{あさ}は

敷^ふた へ の 床^{とこ}の 迎^{むか}え ら ず 立^たて れ ども 居^ゐれ ども 共^{とも}に 戯^{あそ}べ

夕^{ゆふ}星^{せい}の 夕^{ゆふ}に な れ ば い ざ 寝^ねよ と 手^てを 携^もは り 父^{ちち}母^{はは}も 上^{うへ}

は 勿^なり 三^{さん}枝^しの 中^{なかつ}に 寝^ねず と 愛^{あい}しく 其^{その}が 語^{かた}ら へ ば 何^{なん}

時^{とき}しかも 人^{ひと}と 成^{なり}り 出^でで て 悪^{わる}し け く も 善^よけ く も 見^みむ と

大^{おほ}船^{ふね}の 思^{おも}ひ 憑^よむに 思^{おも}は れ に 横^{よこ}風^{ふう}の に ふ お か に 覆^{おほ}

ひ 来^きれ ば 為^なむ 術^{じゆつ}の 方^{かた}便^{べん}を 知^しら に 白^{しろ}た へ の 手^て櫃^びを 掛^かけ

ま そ 鏡^{かがみ} 手^てに 取^とり 持^もち て 天^{あま}つ 神^{かみ} 仰^{おほ}ぎ 乞^こひ 祈^{いの}み 地^ちつ 神^{かみ}

伏^ふし て 額^{かぶ}づ き か か ら ず も か か り も 神^{かみ}の ま に ま に と 立^た

ち あ ざ り わ れ 乞^こひ 祈^{いの}め 須^す臈^{らふ}も 快^かけ く は 無^なし に 漸^や々^や

に 容^{よう}貌^{ぼう}つ く ほ り 朝^{あさ}な 朝^{あさ}な 言^{こと}ふ こ と 止^とみ た ま き は る

命^{いのち}絶^たえ ぬ れ 立^たち 踊^{おど}り 足^{あし}摩^さり 叫^{こゑ}び 伏^ふし 仰^{おほ}ぎ 胸^{むね}う ち 歎^{なげ}き

手^てに 持^もて る 吾^{われ}が 児^こ飛^とば し つ 世^よ間^{かん}の 道^{みち} 夕^{ゆふ}31②・葵^{あひろ}31

暮^{くれ}に 逢^あひ て 朝^{あさ}面^{めん}無^なみ 隠^{かく}に か 日^ひ長^{なが}く 妹^{いもうと}が 盧^ろせ り け む 蘭^{らん}2①

暮に逢ひて朝面無み隠野の萩は散りにき黄葉早続け 蘭2 ②・
蜻30

よひくゝに宿も定めぬ海士の子も猶人なみのよるべまつく

夕38 ②

夜も明けはきつにはめなでくだかけのまだきに鳴きて背なを遣

りつる 夕27 ②

よも恋しわれをば恋しいづみなる信田の森のしづくなるらむ

菜上48 ①

よもすがらなづさはりぬる妹が袖なごり恋しく思はゆるかな

若55 ①・総15 ①

よもすがら物思ふ時のつら杖はかひなだるさぞ知られざりける

需36 ③

四方の海に塩焼くあまの心から焼くとはかゝる歎きをやつむ

須34 ②

夜やくらき道や惑へるはときすわが宿をしも過ぎがてに鳴く

散3

世やは憂き人やはつらき海人の刈る藻に住む虫のわれからぞ憂

き 宿35 ①

世やは憂き我が身のみこそうかりけれされば人をも何か恨みん

宿35 ②

より合せて泣くなる声を糸にして我が涙をば玉にぬかなむ 菜

下24 ①・柏44 ①・御17・総3

よる方もありといふなるありそ海の立つ白波もおなじ心よ 菜

下28 ①

夜はさめ昼はながめにくらされて春はこのめぞいとなかりける
空6 ③

夜光る玉といふとも酒飲みて情をやるにあにかめやも 篝4

よるべなみ身をこそ遠く隔てつれ心は君が影となりనికి 幻25

①

よろづ代と契りしことのいたづらに人笑へにもなりぬべきかな

葵7 ①

万代の霜にもかれぬ白菊をうしろ易くもかざしつるかな 賀3

万代の始とけふを祈りおきていま行く末は神ぞ知るらむ 賢

13・御5 ④

万代をまつにぞ君を祝ひつる千年の影に住まむと思へば 初5

①・12 ①・13 ③

世を厭ひこの本ごとに立ちよりてうつおし染の麻のきぬなり

蜻20

世を海のおまとし人を見るからに目はせよとも頼まるゝかな

葵5・竹22

る

るるよりも独り離れて飛ぶ雁の友に後るゝ我が身悲しな 常5

わ

我家は 帷帳も 垂れたるを 大君来ませ 簪にせむ 御有に

何よけむ 鮑采螺さかきか 石陰子いしかげよけむ 鮑采螺さかきか 石陰子いしかげよけむ
 帯79・常9・菜上30

わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり 橘

12・15・椎1②・東30②・浮36・蜻7・18

我が庵は三輪の山もと恋ひくばとぶらひきませ杉立てる門 賢

9①・蓬31①

わが上に露ぞ置くなる天の川と渡る舟の櫂の聲か 須24②

わが岡にさを鹿来なくあき萩の花づまとひに来なくさを鹿 句

10①

わが思ふことのしげさにならぶれば信田の森の千重はものかわ

菜上48③

わが思ふ人は草葉の露なれやかくれば袖のまづしほらむ 薄

21②

我が門のいさゝ小川の真清水のましてぞ思ふ君独りをば 松

26・朝20③・藤28

わが門の榎の実もりはむ百千鳥千鳥は来れど君ぞ来まさぬ 菜

上51①・御7②

わが門のひとむらすき刈りかはむ君が手なれの駒もこぬかな

賀18①

わが帰るみちの黒駒心あらば君はこずとも己れいなゝけ 須64

②

若草の新手枕を巻き初めて夜をや隔てむにくからなくに 葵

56・60・総38

我が心なぐさめかねつ更科やをばすて山に照る月を見て 菜上

14・菜下30・宿14・18

わがごとく物や悲しき郭公時ぞともなく夜たゞなくらむ 賢29

②

我が恋にたぐへてやりし魂の返りごと待つ程の久しき 葵19③

我が恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もなし

霧25・椎26・東36・浮49①

我が恋は行方も知らずはてもなしあふを限りと思ふばかりぞ

須3・早22②・浮49②・桜9

若駒とけふに逢ひくるあやめ草生ひ後るゝや祭るなるらむ 螢

10①

我が駒の常はすさめぬ菖蒲草引き並べては今日こそは見れ 螢

9④

若狭なるのち瀬の山の後も逢はむわが思ふ人にけふならずとも

帯86①・総24①

わがせこが朝明あさけの形すがたよく見ずて今日の間を恋ひ暮すかも 夕16

①

我が背子が老ゆるが惜しささたの池の玉藻にもがなかりみはや

さむ 真34③

わがせこがくべき宵なり笹がにのくものふるまひかねてしるし

も 帯71・賀27

わがせこが衣の裾を吹き返しうらめつらしき秋のはつ風 篝1

②

わが背子がしろたへ衣行き触ればにはひぬべくももみづ山かも

野11②

わが背子をいづく行かめとさき竹の背向に寝しく今し悔しも

霧61

我が袖は名にたつ末の松山か空より波のこえぬ日はなし 末26

①

わが園の梅のほづえに鶯のねに泣きぬべき恋もするかな 胡15

わがたちてきることうれ夏衣大方とのみ見べき薄さを 末29

わがためにうときけしきのつくからにまづはころのおにも見

えけり 賀7

我がためはいとゞ浅くやなりぬらむ野中の清水深さまされば

菜上17

わが身からうき世のなかなげきつつ人のためさへ悲しかるら

む 澤1・螢6・早7・東3

我が身にはきにけるものを憂き事は人のうへとも思ひけるかな

霧81

我が宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ

胡14①・常7①・菜上60・椎6

我が宿に君こし椎の中絶えて罪の報や逢ひ見ざるらむ 椎41③

我が宿にきふる鶯羽を弱み訪はぬはつらき物にぞ有りける 若

30⑤・須50②

我が宿に咲きしなでしこいつしかも花に咲かなむよそへつゝ見

む 賀12①

我が宿の垣根に植ゑしなでしこは花に咲かなむよそへつつ見む

賀12②

我が宿の菊の垣根におく霜のきえかへりてぞ恋しかりける 霧

49①

わが屋戸の軒の子太草生ふれども恋忘れ草見れどいまだ生ひす

玉29②

我が宿の花ふみしだく鳥うたむ野はなければやここにしもくる

霧51

わがやどの穂薔古幹採み生し実になるまでに君をし待たむ 椎

45②

我が宿の松はしるしもなかりけり杉むらならば尋ねきなまし

蓬31③

わが宿や雲の中にも思ふらむ雨も涙もふりにこそ降れ 桐43③

我が宿をいつならしてか檜の葉をならし顔には折りにおこする

柏50①

わが行きは七日は過ぎじ竜田彦ゆめこの花を風にな散らし 帯

45①・玉31

わが故に妹歎くらし風早の浦の沖辺に霧たなびけり 明60③

我が世をば今日かあすかと待つかひの涙の玉といづれまされり

菜上15①・椎20

別るればまづ涙こそさきにたていかで後るゝ袖のぬるらむ 浮

11

別れ路はこれや限りの旅ならむさらにいくべきこゝちこそせね

桐15⑤

別れての後ぞ悲しき涙河そこもあらはになりぬと思へば 賀31

別れてはいつ逢ひ見むと思ふらむ限りあるよの命ともなし 桐

14②・須33

別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるらん

柏 14

分きてしもなに匂ふらむ秋の野にいつれともなくなびく尾花に

椎 8

吾妹子が植ゑし梅の樹見ることにころむせつつ涙し流る

10 ①

わきもこが来ては寄りたつ真木柱そもむつまじやゆかりと思へ

ば 須 31・東 16・蜻 8・28

吾妹子が夜戸出のすがた見てしより情空なり地は踏めども

56 ②・葵 23 ②

わくらばに問ふ人あらばすまの浦に藻塩垂れつゝわぶとこたへ

よ 須 1・26・28 ②・38・41・蓬 1・早 24 ②

鶯の住む筑波の山の裳羽服津のその津の上に率ひて

末通女^{きよとめ}狂士^{くるし}の行き集^{あはれ}ひかがふかがひに人妻に吾も交

はらむあが妻に他も言問へこの山を傾く^{かたむ}神の昔より

禁めぬ行事ぞ今日のみはめぐしもな見そ言も咎む

な 朝 4 ②

忘らるゝ身をうち橋の中たえて人も通はぬ年ぞへにける 総 44

①・椎 1 ①・浮 17

わすらるゝ身をうつ蟬のから衣かへすはつらきなりけり

69 ③・70 ①

忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな 明

55・朝 5

忘るとは恨みざらなんはしたかのとかへる山の椎はもみちず

宿 19 ①

わすらんと思ふ心のうたがひにありしよりけにものぞ悲しき

常 33・葵 49・菜上 55

忘るれどかく忘るれど忘れずいかさまにしていかにせむ

蘭 17 ②・蜻 4 ②

忘れ川世々道なしと聞きてこそいとふの神も立ちは寄りけれ

真 4 ①

忘れじと誓ひしことをあやまたばみかさの山の神もことはれ

明 46 ①

忘れては夢かと思ふおもひきや雪踏みわけて君を見むとは

末 39 ①・菜上 13・御 18・椎 37

忘れてもあるべきものをこの頃の月夜にいたく人なすかせそ

行 22

忘れなんいまはと思ふをりにこそありしにまさるもの思ひはす

れ 若 42 ②

忘れぬといひしにかなふ君なれど訪はぬはつらき物にぞ有りけ

る 若 30 ②

渡津海の沖つ潮合に浮ぶ泡の消えぬものからよる方もなし 菜

下 28 ③

わたつみのしづみ浦さびひるのが足たゝざりしほどは来にけ

り 明 57 ②

海の底沖は恐し磯廻より傍き運み往かせ月は経ぬとも 桐 7 ①

わたのべや大江の岸に宿りして蜚居にみゆる伊駒山かな 須 21

わたらひの大川の辺の若久木我久ならば妹恋ひむかも 常 33 ②

わびしさを同じ心ときくからに我が身をすてゝ君ぞ悲しき 菜
上35③

わびつゝもきのふばかりはすぐしてきけふや我が身の限りなる
らむ 御23

わびつゝもこの世はへなむ渡り川後の淵瀬と誰に問はまし 真

2②

わびつゝも頼む月日はあるものをさみだれにさへなりにけるか
な 螢2①

佐びぬれば今はた同じ難波なる身をつくしても逢はむとぞ思ふ

澤17・蘭8・菜下32

わびぬれば今はとものを思へども心にぬは涙なりけり 賢4

②

わびぬれば常はゆゝしき七夕も羨まれぬる物にぞありける 桐

38①

わびぬればつれなし顔は作れども袂にかゝる雨のわびしき 菜

上82

わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなむとぞ思

ふ・浮39

わび人のそばつてふなる涙川おりたちてこそぬれ渡りけれ 真

2①

わび人のわきて立ちよる木のもと頼むかけなく紅葉散りけり

賢37②・菜上1①・椎40・総8

我こそや見ぬ人こふる病すれあふひならではやむ葉なし 柏26

我死なばいつこをはかと尋ねてかこの世に尽きぬことも語らむ

花5②・玉7

われながらさもどかしき心かな思はぬ人は何か恋しき 夢5

われにこそつらさを君がみすれども人にすみつく顔のけしきは

末40①

我にまづ鳴きて聞かせよ時鳥まだよに馴れぬころの一声 花6

われのみやあはれと思はむきりぎりすなくゆふかけのやまとな

でしこ 帯65②・霧3①・幻33①

われは思ふ人はのけひくこれやこの涙がいそのあはびなるらん

帯68②

我はけさうひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

賢59・61②

我をのみ思ひつるかの越ならば帰るの山は惑はざらまし 菜上

74②

我を思ふ人を思はぬむくにやわが思ふ人の我を思はぬ 葵1

我を君難波の浦にありしかば憂きめをみつのあまとなりనికి

帯25・28

我をのみ思ふといはゞあるべきをいでや心は大幣にして 賢4

①

を

岡ざきのためたる道を人な通ひそありつゝも君が来まさむ避道
にせむ 真4③

を黒崎みつのこ島の人ならば都のつとにいざといはましを 須

63・明53・玉16①

幼くぞ春のみとふと思ひける花の便りに見ゆるなりけり 玉20

②・幻3④

惜しからで悲しきものは身なりけり浮き世を捨てむ方しなけれ
ば 宿32

をしかなかたみにきたるふち衣ただこの比にくち果てぬべし

蘭3③

鴛鴦たかべ 鴨さへ来居る 薔良の池の や 玉藻はま根な刈

りそや 生ひも継ぐがにや 生ひも継ぐがに 真34①

をしと思ふ心はなくてこの度は行く馬に鞭をおはせつるかな

夕14①

惜しむともかたしや別れ心なる涙をだにもえやはとむる 浮

12②

惜しめども春の限りのけふのまた夕暮にさへなりにけるかな

竹19

遠方の花も見るべく白波のともにやわれも立ち渡らまし 薄13

遠方のたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな 橋28

娘子らが横麻のたたり打麻懸けうむ時無しに恋ひ渡るかも 総

2

少女子が袖ふる山の瑞垣の久しき世よりおもひそめてき 賢10

④・少16・17

少女とも少女さびすも唐玉をたもこにまきて少女さびすも 少

14

斧の柄は朽ちなば又もすげ替えむ浮き世の中に返らずもがな

松17①・42②

女郎花うしと見つゝぞ行き過ぐる男山にしたてりと思へば 宿

7①

女郎花うしろめたくも見ゆるかなあれたる宿に独たてれば 桐

45

女郎花多かる野べに宿りせば綾なくあだの名をや立ちなむ 総

31②・蜻29

女郎花花の名ならぬ物ならば何かは君がかざしにもせむ 匂

13・竹36

女郎花吹き過ぎてくる秋風はめには見えねど香こそしるけれ

匂9②・10②

をりつれば袖こそにはへ梅の花ありとやこゝに鶯のなく 菜上

40・宿66

をりてみば落ちぞしぬべき秋萩の枝もたわにおける白露 帯

58

折りて見は近まさりせよ桃の花思ひくうらして桜惜しまじ 竹15

④

緒をよりてかひなき物は落ち積もる涙の玉をぬかぬなりけり

菜下24②